俺はしがないサラリーマン。
三十路を過ぎたが結婚もしておらず、彼女もおらず、大した趣味もなく、
家と会社を往復するだけの毎日を送っている。
今日も残業を終えて、会社近くの駅で電車を待っている。

そんな俺が、唯一楽しみにしている事がある。
最近、一部のネット界隈で話題になっている、美少女JKだ。

その子の名前は白神令奈ちゃん、05歳。
特に成績優秀というわけでもなく、かといって頭が悪いわけでもないが、
少し天然な所があり、いつもボーとしている。
友達は少なく、彼氏もおらず、目立たない大人しいタイプ。
JCの頃からやっている体操を続けているも、大した成績は出せず、
それでも本人はあまり気にせず、何となく体操を続けている。

そんなどこにでもいるJKが、なぜ一部界隈で話題になっているか。
それは、白神令奈ちゃんがとんでもない美少女である事と、
天然さゆえの無防備さを備えている事だ。

【俺】「へへっ…それじゃ電車が来るまで、今日の隠し撮り画像を見るとするか…」

俺はスマホを操作し、ネット上にある違法隠し撮りサイトへとアクセスする。
そこには、白神令奈ちゃんの新たな写真がアップロードされていた。

【俺】「うっほ…やべえっ…マジ美少女だし、エッッッッッッッッッ口」
写真はどこかの体育館の隠し撮りだろうか。レオタード姿の令奈ちゃんが映し出される。
おそらくはJC時代から使い込んでいるレオタードだろうか、
体が発育してレオタードが相対的に小さくなり、
体に食い込んでボディラインを際立たせている。
さらに、使い込んで生地が薄くなっており、
汗がしみ込めばうっすらと肌を透けさせる。
練習は使い古しの服で充分という事なのだろうが、
あまりに無防備で興奮する。
【俺】「こんな美少女をめちゃくちゃに犯してえなあ…」
時間も遅く俺以外に人気が無いとはいえ、駅という公共の場にも関わらず、俺は無意識に呟いた。

そう呟いた直後、電車が入ってくるホーンの音が響いたと同時に、
動画の令奈ちゃんが怒った顔になり、そして俺と令奈ちゃんの目があってしまった。
【俺】「う、うわぁっ！　ごめんっ……！」
ただの偶然だろうが、俺はびっくりして、
おもわずスマホに向けて謝っていた。
しかし、そんな表情でも、
令奈ちゃんの目は本当にキレイで、
魂が吸い込まれるような感覚すら覚えた。
【俺】「…ダメだ…疲れてるな俺。　飯食って寝よ…」
俺はスマホをしまいこみ、ホームに入って来た電車に乗り込み帰宅した。

【令奈】「ふぅ…今日の練習も疲れた…」
私は白神令奈。　友達からは天然とか言われてるけど、普通のJKだと思う、多分。
今日も町の体育館がガラガラだったから、一人で体操の自主練をしてきた。
でも、最近私の練習を見てる人が
1～2人いる気がする。
私はレギュラーでもなく下手なのに、
そんな人間の練習なんか見てて、
何が面白いのやらと思う。
物好きな人もいるものだ。
【令奈】「…でも、大会だと緊張するから、見物客に慣れておく方がいいのかな…」
私はそんな事を考えながらシャワーを浴びて、練習でかいた汗を流していった。

私がシャワーを終え、全身についた水滴をぬぐっている時だった。
練習中に見られていたような視線を感じ、私は思わずそちらの方を見た。
【令奈】「…誰？」
勿論、だれもいるはずがない。
大会に出る事が出来たなら、
見物客の視線に慣れる事も必要、
そんな事を考えていたから、
そんな気がしただけだろうか。
【令奈】「…見物客の視線とか考える前に、真面目に練習しなきゃ…」
くだらない事を考えてしまったと反省し、私はお風呂を出て、ベッドへともぐりこんだ。

【俺】「んっ…」

俺は帰宅して飯と風呂を済ませて、さっさとベッドへともぐりこんだのだが、
どうにも寝つきが悪く、夜中に何度も目を覚ましてしまった。
体にも軽く違和感があるし、寝違えたかもしれない。
それに声もおかしい気がするし、風邪でも引いたかもしれない。

【俺】「…仕方ない、しばらく起きてるか…」

俺はベッドから体を起こし、枕元にあるタバコを手に取ろうとする。
しかし、そこにあるはずのタバコがない。
会社に忘れてきたか？　まったくついていない。

【俺】「令奈ちゃんの隠し撮りサイトとか見てるから、バチでもあたったかな。
まあ明日も見るんだけども」

そんな事をつぶやきつつ、部屋の電気のスイッチを探す。

【俺】「…あれ？　部屋の電気の位置がおかしい…？　間違えて別の部屋で寝てたか…？
いやいや、いくらなんでもそれは無いよな…」

うっすらと窓から差し込む月明かりを頼りに、俺は壁伝いに歩いて、電気のスイッチを探す。
そして電気のスイッチを付けた瞬間、俺は驚きのあまりその場で硬直してしまった。

【俺】「こ、この部屋…い、いや…俺の恰好…」
部屋が俺の部屋とは全く別物になっている。
いや、それは些細な問題だ。
【俺】「…お、俺が
令奈ちゃんになってる!?」
俺は驚いてその場に尻もちをついて座り込んだ。
でも、どう見ても目の前の鏡に映し出される姿は、
体操服を着た美少女で…三十過ぎのおっさんではない。
【俺】「夢か…？　夢だよな…？　いてぇっ！」
俺は軽くほほをつねった。痛い。夢じゃないのかもしれない。

【俺】「し、しかしこれはいったい…」
俺がうろたえていると、ドアをたたく音が聞こえる。
まずい、見つかってしまう。
【父親】「令奈、どうしたんだ？
こんな夜中に？」
【俺】「あっ…。こ、怖い夢見て…」
【父親】「ん、そうか。もう遅いから、
早く寝るんだぞ？」
俺が自分の姿にびっくりして大声を出して尻もちをついたから、
令奈ちゃんの親が心配して様子を確認に来たらしい。
とりあえずごまかす事はできたようだが、これでいよいよ
本当に俺が令奈ちゃんになっている事は疑いようもなくなった。

【俺】「…さて…これが夢でないとしたら、どうしたもんか…」
そんな事を一瞬考えた後、目の前の鏡に目を奪われる。
【俺】「それにしても、生で見ると
めちゃめちゃ可愛いな…」
自分の置かれた状況も把握でいないまま、
目の前の鏡に映る自分の、令奈ちゃんの姿を堪能する。
試しにダブルピースしてみる。めちゃくちゃ可愛い。
寝る時は体操服派なのか。よく似合ってて可愛い。
体操服からはノーブラの乳首がうっすら透けていてエロい。
俺は、こんな特殊な状況にも拘わらず、
目の前の令奈ちゃんの姿に興奮を抑える事ができなくなりつつあった。

【俺】「令奈ちゃんには悪いけど、失礼して…」
俺はさっそく、令奈ちゃんの体操服を脱いでいく。
どうやらJC時代の体操服をパジャマとして使っているようだ。
使い古された体操服とブルマの肌触りが心地よい。
そして、令奈ちゃんは寝る時はノーパンノーブラ派のようで、すぐに裸になってしまった。
【俺】「こ、これが令奈ちゃんの裸…」
レオタードの下からうっすら透けている令奈ちゃんの乳首と割れ目が鏡に映し出される。
男を知らないであろう、毛の生えていない割れ目と、ピンク色のキレイな乳首。
初めて見る令奈ちゃんの裸、しかも生で、目の前に存在している。
しかもそれが、今は自分自身の体なのだ。俺はどんどん興奮をエスカレートさせていく。

【俺】「…裸も見たし、次は…」
俺は床に鏡を置いて、その前で両足を広げて座った。
それから、ぴっちりと閉じた割れ目に指を這わせ、
ゆっくりと左右へと広げていくと、
ピンク色の割れ目が鏡へと映し出された。
【俺】「こ、これが令奈ちゃんの…」
生まれて初めて見る、
現役JKの割れ目の中身。
俺はその淫らな割れ目に
目を奪われていた。

【俺】「…んっ…あっ…！」
俺は我慢しきれず、割れ目を指で愛撫した。
令奈ちゃんの体は敏感で、強い刺激が
割れ目に走り、俺は思わず声を上げる。
しかし、あまり大きな声を出すと、
先ほどのように令奈ちゃんの
父親に見つかるかもしれない。
でも、指が止まらない。
【俺】「ひぐっ…！」
俺は歯を食いしばりながら、声を殺してオナニーをする。
女の体がこんなにも気持ちいいなんて。俺は夢中になっていた。

【俺】「…はぁっ…はぁっ…」
俺は時間を忘れてオナニーをした。
鏡を見れば、あの令奈ちゃんが
靴下だけの裸というエロい恰好で、
苦悶の表情でオナニーをしている。
俺はそれをオカズに延々と
割れ目を愛撫し続けていた。
【俺】「ふぅ…流石に疲れたな」
指が愛液でべとべとになっている。
女の体のオナニーがこんなに気持ちいいとは。
俺は満足感を覚えながら、ベッドへ横たわった。

翌日。

【令奈】「…裸になってる…」

私が目を覚ますと、パジャマ代わりの体操服が脱ぎ散らかされ、裸になっていた。
そういえば、夜に服を脱いでオナニーした夢を見た気がする。
オナニーなんてマトモにやった事ないのに、あんな夢を見るなんて…。

【令奈】「私、欲求不満なのかな…」

夢にしては妙に生々しく、あそこを触った感覚がリアルに残っているような気がする。
とにかく、もう朝だし、早く着替えて学校に行かなければ。
私はとりあえず制服姿に着替えてから、リビングに向かい食事を取って、学校へ向かった。

【俺】「ふう、昨日はいい夢見たな…」
俺が目を覚ますと、やっぱり三十過ぎのおっさんだった。
まあ夢でもなんでも、あんな美少女になってオナニーできたなら満足だ。
そんな事を考えながら、いつもより少し遅い時間に駅へと向かうと、
偶然、少し遅刻気味な令奈ちゃんと同じタイミングでホームに来たようだ。
【令奈】「…間に合った…」
【俺】「あっ…」
昨日、あの美少女になってオナニーする夢を見たと思うと、
少しの罪悪感と、強い背徳感と興奮を覚えてしまう。また令奈ちゃんになりたい。
そしてそう願った瞬間、令奈ちゃんと偶然目があって、
彼女の目を通して魂が吸い込まれるような感覚を覚えた。

放課後。

私は授業を受けながらも、昨晩見た夢の事を何度も思い出してしまった。
あんなに激しくオナニーをする夢を見た事、その夢が意味している事は何なのか。
考えれば考えるほど、自分自身がいやらしい子なのだという答えが出てしまい、
慌ててその答えをかき消して、そしてまた考えるという堂々巡りをしてしまっていた。

【令奈】「…ん。こういう時は汗を流してスッキリしなきゃ…」

私はいつも通り、ガラガラの体育館で自主練をする。
そしていつも通り、私の部屋な練習を見物しているもの好きな人がいる。
昨日あんな夢を見たからか、その人の視線が妙に気になってしまう。
そんな事を考えているようだから、意識しているようだから、上達しないしレギュラーにもなれないんだ。
私は全身くたくたになるまで練習し、帰宅して泥のように眠った。

会社での仕事を終え、令奈ちゃんになる夢を見る事を期待しながら眠った俺は、再び真夜中に目を覚ました。

【俺】「マジかよ…また令奈ちゃんになる夢を見たぞ…」

しかし、夢というには妙に生々しい。夢とは思えないほど、感覚がしっかりしている。

もしかして、本当に令奈ちゃんになっているのではないか？　幽体離脱で憑依しているとかで。

俺はそれが気になって仕方なくなっていた。

【俺】「…もし俺が本当に令奈ちゃんになっているのなら…」

この段階で証拠を残し、翌朝に確認できれば夢ではないと判断できる。

俺は令奈ちゃんの机から紙を1枚取り出して、そこに俺しか知らない個人情報を書いた。

そして俺は、その紙を持って、令奈ちゃんの家からこっそりと外へと抜け出した。

俺は令奈ちゃんの父親に見つからないよう家を抜け出し、夜道を歩く。
考えてみれば、こんな深夜に令奈ちゃんのような美少女JKが歩いていれば、
さらに、令奈ちゃんは…今の俺は、ノーパンノーブラの体操服姿だ。
俺はドキドキしながら、深夜の道を歩く。
しかし、深夜でも通行人は若干いるようで、俺は何人かとすれ違ってしまう。

【通行人】「…ん？　女の子…？　こんな時間に運動…？」
【俺】「は、はいっ…早起きしてジョギングを…」

体操服姿かつ、もの凄い早起きと言えなくもない時間だったので、何とかごまかす事はできた。
しかし通行人は俺を怪訝な目で見た後、ノーブラで揺れる胸に目を奪われていた。
もし相手が不良やで、このまま連れ去られたりしたら…。
令奈ちゃんがそんな目に合う事を想像をすると、ものすごく興奮して、下腹部が熱くなってしまう。

【俺】「…これで良し、と…」
俺はジョギングのふりをしながら、深夜の町を歩き、目的地へと到達した。
公園の前にある小さなアパートの一室、つまりは俺の部屋だ。
俺は部屋のポストに、令奈ちゃんの部屋で書いた手紙を放り込む。
夢から覚めた時、俺の体に戻った時、手紙があればこれは現実という事だ。
【俺】「ふふっ…どうなるか楽しみだな…」
これが夢ではなく、本当に令奈ちゃんの体になっているのだとしたら…。
夢なら記録は残せないし、できる事も限られるが、現実ならそうではない。
俺は期待に胸を膨らませながら令奈ちゃんの家に戻り、ベッドへともぐりこんだ。

翌朝。
また変な夢を見ていた気がする。
でも今回は、オナニーではなく、夜中にジョギングする夢だ。
はっきりは覚えていないのだけど、何人かに見られていた気がする。
ジョギングを見られるのは別にいいけど、あんな時間に出歩く悪い子だと思われるのは困る。
とは言え、どうせ夢の中の話だから気にする必要もないし、Hな夢を見るよりは良いと思う。
やっぱり、偶然変な夢を見ただけだったんだろう。

【令奈】「でも…」
考えてみたら、実際にHな事をしているわけではないのだし、
Hな夢を見るくらい、別に構わないのではと思ったりもする。
ふとそんな事を考えて、自分がHな夢を期待してた事に気づき、
私は頭をぶんぶんと振って邪念をかき消してから、学校へと向かった。

【俺】「まじかよ…」

翌朝、俺は部屋のポストに、令奈ちゃんの夢を見ていた時に書いた手紙を発見した。
昨日の夢で書いた内容がそっくりそのまま書かれている。
つまり、昨日までの夢は夢ではなく現実だったという事だ。

【俺】「俺の恰好や部屋の状態に変化はなかったな。
令奈ちゃんになってポストに手紙を放り込んだ時も、
中から俺のイビキが聞こえてきたし、あの状態の時の俺の本体は寝てるって事か？」

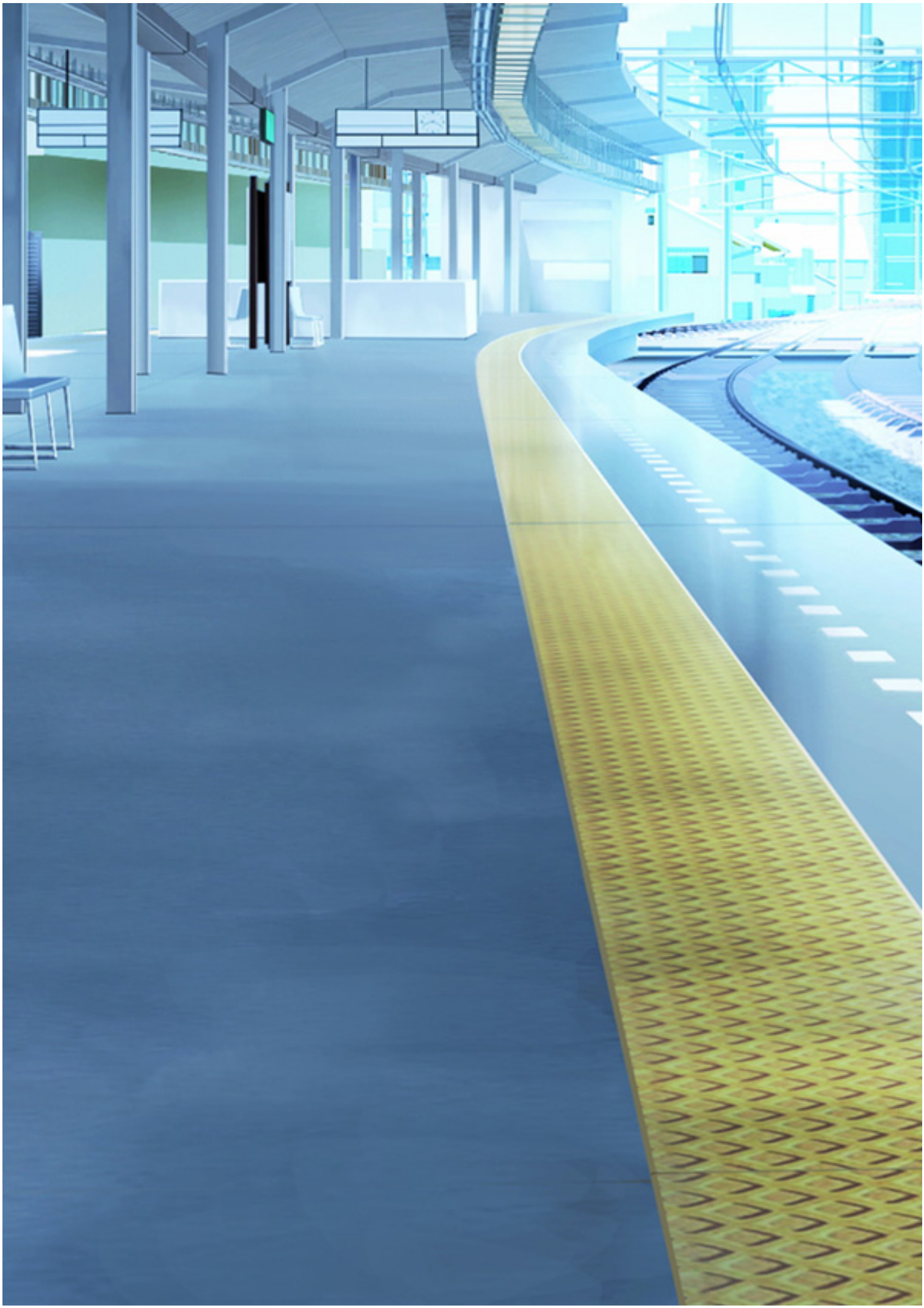
仮に自分が令奈ちゃんに憑依したとして、俺の本体がおかしな事をしたり、
俺の本体に俺が戻れなくなったら、さすがにヤバい。
でも、今のところはそんな事はなさそうだ。

【俺】「なぜこんな事が起きてるのかはわからないけど…ふふっ…」

俺は駅で電車待ちしているにも関わらずニヤついて、周囲の人からちらちらと見られてしまった。
いつもなら恥ずかしいと思うのだが、今はそれよりも期待が大きいからか、周囲の目も気にならない。
だって、あの憧れていた令奈ちゃんの体になれるんだぜ？

【俺】「くっくっく…今夜が楽しみだなぁ…」

あんな美少女JKになれるなら、やることは一つしかないだろう。　俺は期待して夜を待った。



そしてその日の深夜。

【俺】「よし、今日もちゃんと令奈ちゃんの体になれたな…」

俺が目を覚ますと、昨日と同じように
令奈ちゃんの体になっていた。

【俺】「ふふっ…令奈ちゃんには悪いけど…」

俺は今日やろうとしている事を思い出し、ほくそ笑んだ。
やっぱりこの体になったなら、やる事はセックスしかないだろう。
もちろん、相手は決まっている。
俺は令奈ちゃんの親を起こさないようにこっそり準備して、
親に見つからないように、音を立てずに家から外へと出ていった。

俺は昨日と同じように夜道を歩く。
もちろん、誰かとすれ違えば、昨日のようにジョギングと言い訳をする。
【通行人】「昨日もジョギングしてた子だよね？　なんでこんな時間に走ってるの？」
【俺】「あっ…それは…。　この時間って人もいないし涼しいから…」
通行人の男性は、JKの俺が出歩いている事を明らかに不審な目で見ている。
流石に深夜徘徊で警察沙汰になるのはまずい。　俺は愛想よく言い訳をする。
【通行人】「まあそういう事なら何も言わないけど…」
【俺】「し、失礼しますっ…」
男性の目つきが、俺の体を舐め回すようないやらしい目つきに変化した事に気が付き、
俺はその場から逃げ出すように走り、目的地へと向かった。

【俺】「…よし…到着っと…」
俺の目的地は、俺の本体が住んでいるアパートだ。
俺はアパート目の前にある公園に入り、公園の生垣の中に隠しておいた部屋の合い鍵を手に取った。
【俺】「いよいよか…楽しみすぎるな…」
俺は期待に胸を膨らませながら、
アパートの俺の部屋に近づき、ドアを開ける。
アパートの中では、俺の本体が気持ちよさそうに眠っている。
自分の部屋なのに、なぜか赤の他人の部屋に入るような緊張感があるし、
目の前で自分自身が眠っている姿を見るのも、なんだか妙な気分だ。
俺は音を立てず部屋へと入り、内側から鍵をかけた。

【俺】「目の前で自分が寝てるって、なんか妙な感じだな…」
見慣れた部屋なのに、赤の他人の部屋に入ったかのような錯覚を覚える。
しかも、目の前では男が、自分がイビキをかいて眠っている。
少し緊張しながら、俺は準備のために、
体操服を脱いでいく。
まるで、他人の家に忍び込んで
裸になっているような気分で、
かなりドキドキしてしまう。
【俺】「…これ、他人が見たら令奈ちゃんただの変態だよな…」
これからする事は、この程度ではないのだが、俺は背徳感でドキドキしながら、新たな服に袖を通した。

【俺】「ふふっ…令奈ちゃんと言えば、やっぱりこのレオタードだよな」
俺が袖を通したのは、令奈ちゃんがいつも練習で使っている、JC時代のレオタードだ。
今日の練習でも使っていたもので、まだ洗濯していないから、令奈ちゃんの匂いが染みついている。
レオタードはぴっちりと張り付き、食い込み、透けてしまう。
レオタードは伸縮性のある素材で、すべすべした肌触りが気持ちいい。
こんな格好で練習するとは、改めて無防備なエロさを感じる。
【俺】「それじゃ、まずは…」
俺は部屋に置いておいたタブレットを持ち、撮影用のソフトを立ち上げた。

SoftBank

撮影を開始してすぐ、俺は予定通りの演技を開始する。
これはもちろん、令奈ちゃんのHな姿を記録しておく事がメインだが、
何かあった時のために、俺本体は悪くないという証拠を残す目的もある。

【俺】「ん…これでいいかな？　よし、撮れてる撮れてる♪」

タブレットをのぞき込み、可愛らしい令奈ちゃんの顔がアップで映し出された事を確認した後、
俺は少し離れた場所にタブレットを置き、令奈ちゃんの全身が映し出されるようセットした。

【俺】「私は白神令奈、○5歳、○校一年生です。
先日、見知らぬおじさんが住んでいるアパートの合鍵を拾いました。
折角なので、おじさんの部屋に忍び込んでみました。今は深夜3時です」

俺はそう言った後、イビキをかいて寝てる俺の本体を撮影し、再びカメラを令奈ちゃんへと戻した。

【俺】『…私がこのおじさんの家に忍び込んだ理由、それは…♥』
俺はそう言った後、ひと呼吸おいて、ダブルピースと笑みを浮かべながらカメラに向かう。
【俺】「眠っているおじさんを逆レイプして、処女を卒業し、その様子を記録しておくためです♥
私も、もう○学校を卒業して○校生になったんだし、そろそろ初体験してみたいなって♥」
【俺】「それに、動画さえ撮影しておけば、
それを見ながら、いつでもオナニーできるかなって思って♥」
あの令奈ちゃんから出るとはとても思えない、変態すぎる言葉と内容。
俺は言っていて興奮がどんどん高まってくるのを感じていた。